HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「し」の機能：「よ」「から」との比較を含めて
Author(s)	大山, 隆子
Citation	研究論集, 17, 135（左）-155（左）
Issue Date	2017-11-29
DOI	10.14943/rjgsl.17.l135
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/67979
Type	bulletin (article)
File Information	17_008_ohyama.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.17.I 135

「し」の機能 ――「よ」「から」との比較を含めて

大　山　隆　子

要　旨

接続助詞「し」の規範的用法は「並列」を表し「この町は自然が多いし，きれいだし，便利だ。」のような使用である。しかし，最近，若者を中心に「きれいだし。」のように「従属節し。」のみで終わる使用が観察される。このような従属節のみで終わる現象は白川（2009）では，「言いさし」の現象と呼んでいる。これらの「し」は，先行研究で述べられている「し」の用法の中の「婉曲的用法」とは異なり，話し手の強い伝達態度を表す機能を持つものと考えられる。本稿では，先ず「し」の統語的特徴について述べ，次に「し」の語用論的機能について考察する。また「し」と出現位置が似ている終助詞の「よ」と接続助詞の「から」が談話の中でどのような語用論的機能を持つのか比較分析する。

考察の結果としては，「し」は「理由」となるものが複数存在する時は「～し　～し　～。」と「並列」を表し，また「～し，（～，～）」のように「非並列」の場合は，複数の理由の存在を暗示できる。また「理由」を（実は）一つしか持たない場合は，「～し。」の形で打ち止め，あたかも理由が複数あるかのように示す談話効果を持つと考えられる。

また「し」，「よ」，「から」は談話標識として「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示す」機能を持つと考えられる。「し」は「発話内容については判断済みの態度であり，「聞き手への受容要求」については，考慮しないが，効果を示せる。聞き手あるいは，周りと同一認識状況では使用しにくい。反論に使用できる。」などの特徴があると考えられる。

また比較対象とした終助詞「よ」の機能を分析すると，その違いは大きいと言える。「よ」はもともと終助詞であり，「聞き手との関係において」用いられるが，「し」は「変更の可能性がない結論を聞き手に表明する態度である」と言える。「よ」はまた，談話管理は話し手が行い，相手と話す態度を残している。「聞き手への受容要求」があり，聞き手あるいは，周りとの同一認識状況でも使用できる。

次に接続助詞「から」との比較であるが，二つは同じ接続助詞の種類であ

るが，「から」は「論理関係標示接続」であり，「し」は「事実関係認識標示接続」である。この違いから，「から」は前件で確実な根拠・理由となり得るものを挙げ，後件での行動を促す機能を持つ。一方「し」は論理関係ではなく，話し手が認識した事実をつなぐものである。「言いさし」になっても，これらは二つの違いとなって表れているものと考える。

1．はじめに

接続助詞「し」はこれまで複文で並列的に述べる「この店は美味しいし，安いし，きれいだ。」のような用法が規範であったが，最近，「いいし。」のような従属節のみで終わる「言いさし」形式での使用が高校生などの若者を中心に観察される。本稿ではこのような「し」の文法的機能の拡張，あるいは制約の変化が語用論的機能に関わるものと見て，まずその統語的特徴を分析する。また，接続助詞「し」と出現位置が似ている終助詞「よ」，「いいよ。」を比較する。終助詞「よ」は命題の外に現れるなど出現位置が「し」と似ており，本研究の分析の対象とする。また，「し」と範列関係[1]にある，原因・理由の用法を持つ接続助詞の「から」も「いいから。」のように「し」と同じように「言いさし」の使用も多くみられ，比較の対象とする。これら「し」を中心に「よ」「から」が談話の解釈にどのような効果をもたらしているのか，談話文法の枠組みも踏まえてその機能を分析する。

本論文の構成は先ず，２節において，「言いさし」について述べ，先行研究と本研究の「従属節し。」について述べる。次の３節においては「接続助詞と接続の種類」について述べる。次の４節では「「し」の統語的特徴及び意味機能」を見る。５節では「従属節し。」の「語用論的機能」について述べる。次の６節では，「し」と「よ」を比較し，その「統語的特徴」と「語用論的機能」について述べる。次の７節では「し」と範列関係にある接続助詞「から」を比較し，その「統語的特徴」と「語用論的機能」について述べる。最後の８節においては，まとめと今後の課題について述べる。

2．「言いさし」現象

白川（2009）では，「し」に関する「言いさし文」の考察を行っており，「国語辞典」における接続助詞「し」の説明をあげ，「用言・助動詞について，それより前の句の意味を後の句に結

[1] 範列的関係とは，白川（2001：356）では，「今日も雨だ。」と言う場合，「今日」の他に雨が降った「昨日」が暗示されている。この場合，「今日」「昨日」または「一昨日」は並列的な関係にあり，このような関係を「範列的な（paradigmatic）関係」と呼ぶ」としている。

び付け，どのような関係にあるかを示す語」とあるが，少なくとも「し」に関してはこのような考え方に再考が必要である」と述べている。さらに，接続助詞「し」は会話文で「言いさし」の形で独立文的に頻用されるとし，「形式上は主節を伴っていないので一見したところ不完全に見えるにもかかわらず，意味的には独立した文と等価な完結性を有している」と述べている。また「「し」は「し」を挟んだ二つの節を並列的に接続するといった文文法的な機能としてではなく，それの付加された文を談話の中に関係づけるという談話文法的な機能としてとらえるべきである」と述べている。

本研究の対象「従属節し。」は，最近の若者層を中心にした使用の傾向として「し」節のみで終わり，独立文として機能しているもので，「し」節の前に併存する他の文や節はなく，話し手の意図で「し」節のみで終える場合，特別な談話効果を持って使用されるものとし，検証する。

本研究の対象とする「泣いてないし。」のような文を，本論文では「従属節し。」または「～し。」と表記する。

3．接続助詞と接続関係について

加藤（2006：110-123）では，以下のように接続の種類について述べ，接続助詞の用法区分をしている。

「山田孝雄以来，接続は前の節（＝前件）と後ろの節（＝後件）をどう結ぶかによって，二分されてきた。一つは前件を条件として，後件に帰結を述べる「条件接続」であり，二つ目は前件に後件が付加されているとみる「列叙接続」である。また，接続は　①二つの命題の論理関係に関わるものと　②二つの事態の捉え方に関わるものに分けることができるとし，これはほぼ，「条件」と「列叙」に対応する」と述べている。

表 1.【接続助詞の用法区分】

論理関係標示 【条件接続】	仮定帰結関係	ば・と・なら・たら
	原因結果関係	ので・から
	譲歩帰結関係	ても・でも
事態関係認識標示 【列叙接続】	単純接続	て・が・けれど
	対照接続	が・けれど・ものの・のに
	並立[2] 接続	つつ・ながら・たり・し
	展開接続	ところ

[2] 本研究では「並立接続」を「並列接続」とも表記する。

4．「し」の統語的特徴及び意味機能

4.1　先行研究

国立研究所（1951：56-59）では「し」の意味用法として「二つ以上の事実を並べあげ，それらの累加を材料（理由）とする立論（判断）を導く。この場合，他の理由を言外に暗示している形のため婉曲になる」としている。また「言いさし（後続すべき立論を控え目に言外に響かせる。）終助詞的用法」などをあげている。

また，鈴木・林（1973）では「並立助詞の変遷」に付いて，その発生を年代順に記している。その中で「並立助詞」として扱うものは，そのほとんどが他の助詞，助動詞からの転成であると述べ，「し」の発生を江戸時代前期とし，「状態的」であり，近世上方語では「まい・う」以外に付いた例はあまり見当たらないと述べ，現代，東京語ではすべての活用語に付くとしている。

本研究の「泣いてないし。」のような若者を中心に観察される「～し。」の「言いさし」での使用は上記，国立国語研究所（1951）の「婉曲」や「控え目に言う」「し」とは異なるものと考える。本研究の対象であるこれらの使用は，先行研究では扱われていないと言ってよいものと考えられる。これらの「言いさし」の「～し。」は本来の用法から，文法制約の変化または，拡張的使用で生じたものと考え，本研究の研究対象とする。

4.2 「し」の統語的特徴

4.2.1 「し」の構造形式と意味の関係

「し」の構造形式を詳しく見ていく上で，「従属節」及び「し節」を〔P し，Q し〕で表し，「主節」を〔R〕で表すこととする。また表出していない潜在部分を（　　）で表す。

構造形式：〔P し，Q し。〕：並列関係
「し」が二つ並ぶ場合，〔P し〕が並列の関係を表す。「し」は命題と命題を結び付ける。

(1) この店は，おいしいし，きれいだし。
　a　この店はおいしい。
　b　この店はきれいだ。

構造形式：〔P し，Q し〕R。：並列関係　＋　主節
〔～し，～し〕の部分は並列の関係であり，〔Q し〕は理由を表す。この〔　　〕部分が後ろの主節に従属する関係になる。

(2) この店は，おいしいし，きれいだし，また来たい。

構造形式：〔P し。(Q し)〕：従属節し。(潜在的並列)
〔従属節し。〕で打ち止め，後は潜在的に並列が続く場合

(3) この店はおいしいし。(きれいだし，……し……し。)

構造形式：〔P し。(Q し)〕(R)：従属節し。(潜在的主節)
〔従属節し。〕で打ち止め，後は潜在的に主節構造が続く場合，前件と後件の主語が異なる。

(4) この店はおいしいし。(また来たい。)

(5)
a　この店はおいしい。
b　私はまた来たい。

これら「し」の構造形式から，並列の関係は〔～し，～し,〕の〔　　〕内側部分であり，これらの部分が後続の外側の主節部分に接続する場合，従属節として主節に続き，理由の用法が生じていると言える。従って，構造的には並列と理由の用法は，重なりが生じても差し支えないものであり，排他的関係ではないと判断する。

5．「し」の語用論的機能

5.1 「談話標識（discourse marker)」について

語用論の研究分野においては，加藤（2004：214-223）では，談話標識について，「談話標識の定義はいろいろあるが「論理つなぎ語（logical connectives)」や「談話つなぎ語（discourse connectives)」などと呼ばれることもあり，これまでの欧米の研究では‘but’や‘though’などの接続詞，‘after all’や‘so’などの（接続）副詞，‘well’や‘oh’などの間投詞が主に扱われてきた。一方，日本語では「しかし」「だから」などの接続詞のほか「どうやら」「どうも」などの副詞類の分析が行われてきたと述べ，談話標識の定義は「談話上の目印で，言語運用に関する情報を提示するもの」として，「発話に関する情報を談話標識によってあらかじめ提供することで，聞き手に，より適切な受容をさせる機能を持つもの」としている。また，「「伝達上の目印」には重要な役割がある」と述べ，「談話標識の機能」として８つ[3]をあげている。

同じく加藤（2004）では，「談話の目印が「談話標識」なのだとすれば意味する範囲は広くな

り，接続に関わるマーカーはその一部でしかありえない。」とも述べている。「日本語の場合，接続詞と同様の機能を持つ接続助詞があるので，英語を対象とする研究と同じやり方では解決できない問題が生じてくる」とも述べている。下記のように伝える内容に実質的な変わりはない。

(6) 今日は天気が良い。でも　私は出かけない。(接続詞)
(7) 今日は天気が良いけど，私は出かけない。(接続助詞)

「これまでの研究では，意味機能はほとんど同じであるはずの助詞が形態論上の理由で，除外されていたが，談話つなぎ語を考える時，助詞などの自立的でない要素も無視するわけにはいかない。」と述べている。本研究の「し」と「よ」及び「から」も，これらのことから，談話標識としての機能を持つものとし，「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すもの」と考え，これらの談話標識としての機能を具体例をもとに考察する。

5.2 「～し。」の語用論的機能

「し」は本来，接続助詞であるため，理由根拠を述べる場合，「理由根拠①し，理由根拠②し，理由根拠③し……」というように，「し」でつなぐ根拠となるものが多ければ多いほど，その発話内容は，聞き手を納得させられるものとなるはずである。しかし，話し手は敢えて列挙せず，「泣いてないし。」のみで打ち止めている。これは，一見すると矛盾があるように思われる。それでは話し手はなぜ，敢えてこのような方略を取っているのだろうか。

(8)
ロ　ペ：ああ，へへへ。泣いちゃいました？
アキラ：はあ？　泣いてないし。（紙兎ロペ「感動大作」）

---

[3] 【加藤（2004：227-228）による談話標識の機能】
① 情報と情報のつなぎ方【論理的な関係を示すもの】
② 提示する情報に関する話者の確信の度合いを示すもの
③ 情報の取得に関するメタ情報を示すもの
④ 判断のプロセスなど情報の管理状態に関するメタ情報を示すもの
⑤ 発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すもの
⑥ 相手の発話の受容のあり方に関する情報を示すもの
⑦ 発話の事前状況についての話者の認識を示すもの
⑧ 会話を物理的に円滑に進める上で必要な機能を持つもの

上記例(8)の「泣いてないし。」のような使用について，話し手は「従属節し。」で打ち止め「し」を使用することにより，命題内容に対する話し手の発話に対する態度つまり「君はどう思おうと，僕は泣いてないのだから，これ以上この話題については議論の必要が無い。打ち止めにする」，「発話内容については変更しない」という態度を示している。このような発話に対する強い態度を示す根拠としては，もともと「し」は「並列・累加」を表す統語的特徴から，「従属節し。」で終わっていても，話し手の根拠とするものはまだ幾らでも推論可能なのだと考える。話し手の「明示していないが，潜在的根拠はいくらでもある。」との態度である。その潜在性が強い反論を可能にしていると考えられる。敢えて「し」で打ち止め，後は聞き手に推論させる方略を取っているものと考えられる。「結論変更の可能性もないので「～し～し～し」と長く続ける必要はない。」と聞き手に対する主張を強め，その効果を示すことができると言える。一方聞き手は，「話し手が「し」を使用し，打ち止めた構造から「話し手は明示していないが，まだ複数の根拠を持っているかもしれない。反論の余地がない。」と推論することも考えられる。これらのことから，「し」は「聞き手に対する話し手の伝達態度の表示機能」を持つと考える。元々持っていた「並列・累加」の統語的特徴から，語用論的に機能が拡張したものと考えられる。

また，「～し。」は談話においてどのような効果を持つのかを考えると，「理由」となるものが複数存在する時「～し　～し　～し～。」と並列を表すと言える。また，「～し，（～，～）」と（　　）の中は表出せず，非並列の場合は，複数の理由の存在を暗示できると言える。また「～し。」で打ち止めているものは，理由を実は一つしか持たない場合でも，あたかも，複数理由があるかのように示す談話効果を持つと考える。

(9)

A：買い物に行かない？

B：今日は，寒いし。

（B）の「今日は寒いし。」は「今日は寒い」という情報について聞き手（A）は既に入手済みかもしれないが，話し手（B）は，そのことに関しては，関心が無く，自分がとにかく「寒い」と思っているということを聞き手に提示しているものと考えられる。「し」の場合は，説明の態度はなく，これ以上この話題を続ける必要はなく，判断済みという話し手の態度の表明だと考える。また，誘いに対する答えとしては，「行かない」という判断がなされているものと考えられる。

(10)

A：これいいね。

B：？うん，いいし。

(11)

A：これまずいね。

B：いや，おいしいし。

「し」の場合，聞き手の認識と話し手の認識が同じ場合の例(10)は，使用できないとは言えないが，例(11)のように発話者の認識が相手の認識と異なる判断を示す場合や反論などには「し」はその効果を示すことができると言える。

5.3　談話標識としての「し」の機能

「いいし。」における「し」の使用については，「し」は「発話する情報に対する話者自身の伝達上の態度を示す」談話標識としての機能を持つものであると考える。「従属節し。」で打ち止め，後件が言語化されていなくても「し」がもともと持っている「並列接続」の構造から，続く内容は推論可能であると言える。話し手は，その推論の過程を利用することにより，聞き手の受容に対して効果を及ぼしていると考えられる。本来「接続助詞」であった「し」は「従属節し。」のみで使用することにより，後件につなげるという構造制約を変化させ，語用論的機能を拡張してきたと考えられる。

「し」の談話標識としての機能は，発話内容については「結論変更の可能性」はなく，「判断済みの態度」であり，議論の余地がなく，聞き手と話す余地を残こさない態度である。「聞き手への受容[4] 要求」については，考慮はしないが，その効果は十分に示せるものと考えられる。聞き手あるいは，周りと同一認識状況では使用しにくく，むしろ認識が異なる場合の使用が「し」の持つ基本的機能だと考える。従って，反論に使用できるものと考えられる。

6．「し」と「よ」の比較

6.1 「よ」の統語的特徴と先行研究

「し」と終助詞の「よ」は節末に付く点でも共通性もあるが，どのような異なりがみられるのか統語的特徴も踏まえ分析を行う。

まず，下記の「はあ？　泣いてないし。」の「し」の位置に入れ替えられる関係にある機能を持った要素を考える時，「よ・ね・さ・ぞ・わ・ぜ」などの終助詞があることがわかる。これらは伝達モダリティの範疇に位置付けられている。モダリティの観点から益岡（1991）では「よ」と「ね」の分析を行っている。益岡（1991）では，話し手自身が持っている知識のあり方が聞き手の持っている知識のあり方と一致する方向にあるのか，対立する方向にあるのかという観

[4] 「受容」とは，本稿では「相手の言ったことをどう受け止めるか」とする。

点から終助詞「ね」と「よ」の分析をおこない，具体的には「ね」が「話し手の意向と聞き手の意向が調和する判断「一致型の判断」を示し，「よ」は両者の意向が対立する判断，「対立型の判断」としている。また白川（1993）では，「働きかけ（命令系と依頼系の文）において「よ」がある場合とない場合でどのような意味の違いが生じるか」という観点から分析をおこなっている。前者の場合，下記の例をあげ，「よ」がつかない(12)の場合より「よ」が付いた(13)の場合，懇願と言ってよいほどの強い依頼の気持ちが現れているとし，依頼のメッセージを相手に向けて発信するだけでなく，着信まで見届けようとする態度があるとしている。そして「よ」を使う動機には「自分の命令・依頼を相手が受け入れるかどうかは別問題として，ともかくも自分の発話を相手に確実に聞かせることによって自分の相手に対する希望を認識させることである」としている。

(12) ながいきしてください ∅
(13) ながいきしてくださいよ。

(8)
ロペ　：ああ，へへへ。泣いちゃいました？
アキラ：はあ？　泣いてないし。（紙兎ロペ「感動大作」）

(14) a　はあ？泣いてないし。
b　はあ？泣いてないよ。
c　はあ？泣いてないね。
d　はあ？泣いてないさ。
e　はあ？泣いてないぞ。
f　はあ？泣いてないわ。
g　はあ？泣いてないぜ。

終助詞の中でも特に「し」と同じように節末でも使用できる「よ[5]」を「し」と比較することにより「し」の持つ機能の特徴を明らかにしたいと考える。

6.1.1 「よ」の接続要素

まず，「よ」と「し」が接続の上でどのような違いがあるかをみる。

[5] 「ね」「さ」なども節末で使用できる。例）それは大きな問題だってよ/　ね/　さ。

表 2.「し」と「よ」の接続要素

	名詞 学生	名詞＋コピュラ 学生だ	形容詞 高い	形容動詞 静かだ	動詞辞書形 読む	動詞意志形 読もう	動詞テ形 読んで	動詞命令形 読め	動詞ます形 読みます	動詞疑問形 読むか
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
よ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

上記から，次のように「意志形」「命令形」「て形」「疑問形」のような，聞き手に対して使用されるものには「よ」は使用できるが「し」は接続できない。これらのことからも，「よ」が，基本的には「聞き手」に対して用いられる点で「し」との異なりがみられる。

(15) 早く言えよ。
(16) *早く言えし[6]。
(17) 早く言ってよ。
(18) *早く言ってし。
(19) 早く言おうよ。
(20) *早く言おうし

また，「よ」には，間投助詞[7]の「よ」もあるが，

(21) 俺よ，今度よ，かなりよ，試験がよ，良くないと思うよ。
(22) 俺し，今度し，かなりし，試験がし，良くないと思うし。

上記(21)の文末につく終助詞「よ」だけは(22)の例のように「し」に言い換えられるが，間投助詞と考えられる「よ」は「し」では置き換えられない。しかしこの「よ」の場合，方言の使用との関係もあり発話者の地域的属性に制約があると言える。

---

6 一般的には，命令形に付かないとされているが，地域によっては（東京多摩方言，甲州方言など）「命令形」に「シ」がつく「強意を表す方言」もある。これらは本研究の「シ」とは異なるものとする。

7 「間投助詞は「さ・な・ね・よ」があり，語や句などに付く点で終助詞の「よ」と異なる。それを取っても文の内容に影響を及ぼさない。」としている。以上林，池上，安藤編（2004：76）『日本語文法が分かる事典』

また，「よ」は直接名詞に接続できるが，「し」は「だ」を伴わなければならない。「し」は命題性を必要とする。

(23) 学生よ。
(24) *学生し。
(25) 学生だよ。
(26) 学生だし。

野田（2002：261-288）では，終助詞について，その基本的性質について述べ，分類を行っている。終助詞「よ」に付いては，「「よ」はその文の内容が認識されるべきだと話し手が考えていることを表し，基本的には聞き手に対して用いられ，聞き手が文の内容を認識するべきだと，話し手が考えていることが表される。」としている。これらのことからも「よ」は基本的に話し手と聞き手の関係の中で，聞き手に対して用いられるのが「よ」の機能の特徴と言える。一方「し」は聞き手に対して用いられる命令形，意志形，テ形，疑問形に接続できず，「よ」との異なりがみられる。

6.2 「よ」の機能 ──「し」との比較

「し」と出現位置が似ている「よ」との機能の比較について考える。加藤（2001：31-48）及び加藤（2004：244）では終助詞の「ね」と「よ」の談話標識としての分析を行い，その中で，益岡（1991）の先行研究の分析について触れている。「対立型」と判断される「よ」について，「確かに，「違うよ」「おかしいよ」「そうじゃないよ」と聞き手の考えを否定する発話では「よ」が使われることが多く，「対立型」の判断は一見，妥当なように思われるが，しかし，これらは「ね」を用いることも可能である，従って，「対立型」であることが，「よ」の出現を自動的に予告するような関係にはなっていない。また「対立型」の判断マーカーであれば「よ」は聞き手に「同意する」ようなケースでは使用できないはずであるが，「よ」は「同意」に使用できる」として，下記の例をあげている。

(27) あなたのおっしゃるとおりですよ。私の理解不足でした。
(28) 君の言っていることは正しいよ。

そして，「よ」に関して，「「よ」は話題になっている命題内容について，排他的に知識管理[8]す

[8] 加藤（2001）では，「排他的知識管理とは「話題になっている知識や情報に発話者のみが優先的にアクセスできる状況にあるということ」と述べている。

る準備があることを示す談話標識だとみることができる」と述べている。

(29)
A：買い物に行かない？
B：今日は，寒いよ。

（B）の発話「今日は寒いよ。」の「よ」は「話し手（B）が「今日は寒い」という情報を，聞き手（A）より独占的に管理している状態を示している。その後，もし聞き手（A）から，「どのくらい寒いのか」などの説明を求められた場合，話し手（B）は，聞き手が納得するまで，説明を続けるという態度を示しているものと考える。しかし，誘いに対する答え「行く」か「行かない」か，としてはまだ成立していないと考える。

(30)
A：これ，いいね。
B：うん，いいよ。

(31)
A：これまずいね。
B：いや，おいしいよ。

上記の例から，「よ」は話し手と聞き手の認識が同じ場合(30)の例でも，異なる場合(31)の例でも，使用できるものと考えられる。

(32)
ロ　ペ：あれ？先輩だめでした？
アキラ：いや，まあ，あれじゃねえ。
ロ　ペ：ああ，へへへ。泣いちゃいました？
アキラ：はあ？泣いてねえし。
ロ　ペ：いや，目，めっちゃ赤くないすか。
アキラ：昨日，おれ，ほら，あまり寝てねえし。
ロ　ペ：目の下の毛，カッピカッピになってますよ。
アキラ：あっ，いや，これ，ジェル。いや，泣いてねえし。
だいたいよ。あの演出，あざといっていうか，「はい，みなさん，泣くところですよ」的な？

俺とかよ，そういう，いかにもっていうのは，逆に冷めるタイプだし。
ロ　ペ：はあ……。　（紙兎ロペ「感動大作」）

(33)
ロ　ペ：ああ，へへへ。泣いちゃいました？
アキラ：はあ？泣いてねえし。
アキラ：はあ？泣いてねえよ。

(34)
ロ　ペ：目の下の毛，カッピカッピになってますよ。
アキラ：あっ，いや，これ，ジェル。いや，泣いてねえし。
アキラ：あっ，いや，これ，ジェル。いや，泣いてねえよ。

(35)
ロ　ペ：いや，目，めっちゃ赤くないすか。
アキラ：昨日，おれ，ほら，あまり寝てねえし。
アキラ：？昨日，おれ，ほら，あまり寝てねえよ。

上記(33)と(34)の例の場合，「し」の使用を「よ」で置き換えることも可能である。この「よ」の使用の場合は，相手の発話内容についての否定の態度を示し，否定する発話内容については優先的に話し手が管理できるため「よ」を使用していると考えられる。また，相手からの説明の必要性があれば，納得いくまで相手に説明する責任もある。しかし，例(35)の場合は，「おれ，ほら，あまり寝てねえよ。」と「し」から「よ」に置き換えると，文の意味はおかしい。これは，話し手が発話内容について，優先的に管理できるのが「よ」であり，「ほら，（さっき言ったけど）～」[9] などの意味で相手が既にこの知識にアクセスできていると考えられる場合，「よ」を使用すると意味はおかしいことになる。「し」の場合も談話管理は優先的であるが，自分と相手との関係には考慮せず，ただ自分の判断を述べているため「し」は使用できるものと考えられる。

(36) ちょっと，そこまで出かけてきますよ。
(37) 冷蔵庫の中に，果物が入っていますよ。

[9] 「ほら，見てよ。」のような使用は可能である。これは「注意を向ける時使用する「ほら」」であり，用法が異なる。

また，上記例では，話し手が自分の行動予定を告知する場合や，話し手のみが持っている情報を告知する場合である。これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。「よ」は「話し手の発話に関する態度を示す」機能を持つと考える。また，「よ」は「話者が排他的に情報を管理する準備があることを示す命題に付くマーカーである」と言える。

従って「よ」は「談話管理は話し手が行う」と考えられる。

6.3 「しよ」の使用について

また，下記のような「しよ」の例もみられる。

(38)

アキラ先輩：負けたの？

ロ　　ペ：いや，言っていいんすか？

アキラ先輩：その，言っていいとか最悪。勝ちましたって言ってるみたいなもんだしよ。

（紙兎ロペ「録画」）

上記発話の＿＿部分において，

(39) 勝ちましたって言ってるみたいなもんだしよ。は成り立つが，

(40)*勝ちましたって言ってるみたいなもんだよし。は成り立たない。

この理由としては，先の分析から，(39)は「し」で，話し手の結論を一方的に述べ，「よ」で聞き手に対して発話内容の受容要求をしている。

しかし(40)の方は「よ」で聞き手に対する受容要求をしておきながら，受容要求には考慮しない「し」をつけると発話内容に対する整合性が保てないからだと考える。

6.4　談話標識としての「よ」の機能

「よ」は，談話標識として「発話する情報に対する話者自身の伝達上の態度を示す」機能を持つと考えられる。談話管理は話し手が行うと言える。また「聞き手への受容要求」を持ち，聞き手や周りとの同一認識状況及び，異なる認識状況でも使用できるものと考えられる。従って，議論の余地もあり，「説明する態度」や「聞き手と話す態度」を残していると言える。

上記から「よ」と「し」は談話標識として「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示す」点では同じであるが，機能を詳しく見ていくとその違いは大きいと言える。「よ」はもともと終助詞であり，「聞き手との関係」において用いられるが，「し」は聞き手がいても，話し手は「発話内容について聞き手の受容の必要性は考慮せず，変更の可能性がない結論を聞

き手に表明する態度である」と言える。

7．範列関係にある「し」と「から」の比較

7.1 「から」の統語的特徴と先行研究

先の3節における加藤（2006）「接続助詞の用法区分」では，「から」は論理関係標示（条件接続）であり，「原因結果関係」を表す接続助詞として分類されている。一方「し」は「事実関係認識標示」（列叙接続）であり，「並立接続」を表す。

また，国立国語研究所（1984）では，接続助詞「から」について，「原因・理由を表し，表現者が，前件を後件の原因・理由として，指定して結び付ける言い方であり，「ので」に比べて，条件としての独立性が概して強い。またこの用法において，「～は～からだ」の形で結果・帰結を先に述べて，原因・理由を後で説明する言い方もある」としている。

7.1.1 「から」の接続要素

まず，「から」と「し」が接続の上でどのような違いがあるかをみる。

表 3.「し」と「から」の接続要素

	名詞 学生	名詞＋コピュラ 学生だ	形容詞 高い	形容動詞 静かだ	動詞辞書形 読む	動詞意志形 読もう	動詞テ形 読んで	動詞命令形 読め	動詞ます形 読みます	動詞疑問形 読むか
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
から	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×

「から」は南（1974，1993）の従属句の分類[10]では，「し」と同じように「C類」に分類される。接続する要素でみると「から」と「し」はほとんど同じであると言える。

(41) *読もうから。（意志形）

[10] 南（1974，1993）では，従属句を「どのような要素を内部に含むことができるか」を基準としてA類，B類，C類，D類に分類している。

(42) *読んでから[11]。(て形)
(43) *読めから。(命令形)
(44) *読むかから。(疑問形)
(45) *読もうし。(意志形)
(46) *読んでし。(て形)
(47) *読めし。(命令形)
(48) *読むかし。(疑問形)

聞き手への働きかけを表す，命令形，意志形，疑問形などに「から」が接続しないことは，接続要素の面からは，前件「から節」では「し節」と同じように，聞き手への働きかけの機能は少なく主観的と言える。「～から」の部分で，話し手の主観的理由を述べるのに「から」は適していると言える。

(49)
アキラ先輩：天然，高くねえ？
魚屋：　　そりゃ，おめえ，あれだよ。天然の方がおいしいに決まってるからだよ。
アキラ先輩：いや，同じ魚だし。
魚屋：　　いや，おめえ……。(紙兎ロペ「ふぐ」)

(49)'
アキラ先輩：天然，高くねえ？
魚屋：　　そりゃ，おめえ，あれだよ。天然の方がおいしいに決まってるからだよ。
アキラ先輩：いや，同じ魚だから。
魚屋：　　いや，おめえ……。

上記例では「し」を使用して打ち止めているが，「し」の場合は並列の関係で，後にまだ根拠となるものが続く可能性もあることから，魚屋はその後の返答に窮しているように見える。一方「から」は「～だから。」で根拠の提示は限定されている。

また，上記(35)の例を下記のように「～のは～からだ」の強調構文にしてみると，「し」では成立しない。つまり，「理由」を確定し強調する場合は，「から」の方が適していると考えられ

[11] この場合は接続助詞の「から」である。「本を読んでから，寝た。」の「から」は格助詞の「から」で，異なる。

る。この点は「し」と「から」の違いと言えるだろう。

(50) 目が赤いのは，昨日，寝てないからだ。
(51)＊目が赤いのは，昨日，寝てないしだ。

7.2 「から」の機能 ──「し」との比較

白川（2009）の研究では「から」の後件には，「依頼，命令，推量，意志，質問」など，聞き手への何らかの行為を要求する表現がくると述べているが，比較してみると以下のようになる。

(52) 大事なことだから，良く聞け。（命令）
(53) ？　大事なことだし，良く聞け

「から」の場合，前件だけでも後件は「し」の場合より推論しやすい。後件が「要求」などを表す場合，

(54) 大事な事だから。（よく聞いてください・忘れないでください）など，後件はある程度復元しやすい。
(55) 大事な事だし。（何回も聞いているし・忘れない）

「し」の場合も並列の用法から，後件には並列や，発話内力を持っている文が来ることも可能ではある。しかし「から」の場合の方が，確定的な理由を挙げ，その理由から後件で何らかの行為要求をする場合に適していると言える。

(8)
ロ　ペ：ああ，へへへ。泣いちゃいました？
アキラ：はあ？　泣いてないし。（紙兎ロペ「感動大作」）

(8)’
ロ　ペ：ああ，へへへ。泣いちゃいました？
アキラ：はあ？　泣いてないから。

上記例では「し」の場合，行為要求の文も推論可能ではあるが，「から」を使用する方が後件に例えば「もう言うな」などの禁止や命令などの行為要求の文が類推しやすい。

次に下記の例で冒頭で表出する「し」を「から」に変えてみると「から」でも置きかえられ

る。これは，先行文脈が無く，聞き手への働きかけと言うより宣言するような場合で話し手の考えを独断的に述べる場合は「し」と「から」は適していると言える。

(56)
牧野：じゃ，俺，あっち，行っとくし。
畑中：おれ，ここでいいっすか。

(57)
牧野：じゃ，俺，あっち，行っとくから。
畑中：おれ，ここでいいっすか。

また，下記のような例の場合「し」も「から」も使用できる。「し」の場合，複数の理由も潜在的に考えられる。「から」の場合，複数の理由ではなく，「雨が降っている」という確定的な根拠が後件の行為要求と結び付いていると言える

(58)
A：買い物に行かない？
B：a　今日は，雨が降っているし。(寒いし，風も冷たいし……出かけたくない。)
B：b　今日は雨が降っているから。

また，次のように根拠となり得る理由を尋ねる質問に対して，答える場合には「～から」を使用できるが「し」は使用できない。また「から」は「だ」をつけて「～からだ」と文を完結することができるが，「から」と同じように「～しだ」で終わることはできない。「し」は「し」の前に「からだ」を内部に含めることはできるが，そのあと「し」をつけてもそれは，「従属節し」である。

(59)
(から)
A：なぜ，人がたくさんいるのですか。
B：野球チームの優勝パレードがあるからです。
　　野球チームの優勝パレードがあるからだ。
(60)
(し)
A：なぜ，人がたくさんいるのですか。

B：*野球チームの優勝パレードがあるしです。
　　*野球チームの優勝パレードがあるしだ。
　　野球チームの優勝パレードがあるからだし。

(61)
野球チームだからだ。
野球チームだから。
野球チームだし[12]。

これらのことから，確定的に，理由・根拠を断定する場合，「から」は適しているが，「し」は同じように使用できないという制約がみられる。また上記例のように「から」は「だ」をつけて「からだ。」のように，文を完結することが可能であるが，「し」はその内部に「だ」を含むことはできるが「しだ。」で終わることはできない。これは「～から。」の言いさし文が，文が完結した「からだ。」から「だ」を消去した「言いさし」も考えられる一方，「し」は「だ」で文の完結はできないため，「し」節内に含まれる要素に「し」を付加していると考えられる。この点は更なる検証を必要する。

また，下記のような同一認識上では「から」は「し」と同様に使用が不自然である。

(62)
A：これいいね。
B：？うん，いいから。

(63)
A：これまずいね。
B：いや，おいしいから。

(64) ちょっと，そこまで出かけてきますから。
(65) 冷蔵庫に果物が入っていますから。（食べてください。）

上記例(64)(65)では，話し手が自分の行動予定を告知する場合や，話し手のみが持っている情報を告知する場合である。たいていの場合，これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。この場合，「から」は「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すマーカー」

[12]「から」の場合も「～だから」は可能である。

として機能していると言える。「から」はまた，「話者が排他的に管理する準備があることを示す命題に付くマーカー」であると言える。従って「から」は「談話管理は話し手が行う」と考えられる。

7.3　談話標識としての「から」の機能

談話管理は話し手が行う。「聞き手への受容要求」が強い。話し手が，これが確固たる理由・根拠と考えるものを聞き手に強く主張することにより，話し手に何らかの行動要求を促す。周りとの同一認識上で使用しにくい。

この節では「し」と「から」の比較を行ったが，二つは同じ接続助詞の種類であるが，「から」は論理関係標示接続であり，「し」は事実関係認識標示接続である。この違いから，「から」は前件で確実な根拠・理由となり得るものを挙げ，後件への行動を促す機能を持つ。

「から」の後件には，行為要求の文が来ることが多い。行為要求文は，話し手にその確定的な理由を提示するのが効果的であると言える。一方「し」は論理関係ではなく，話し手が認識したまとなりとなる事実をつなぐものである。「言いさし」になっても，これらは二つの違いとなって表れているものと考える。

8．まとめと今後の課題

「し」と出現位置が似ている「よ」と「から」も，それぞれ，談話標識として「発話する情報に対する話者自身の伝達上の態度を示す」機能を持つと考えられる。

「し」は「従属節し。」で打ち止めている場合でも，本来の並列の用法から，潜在的根拠は引き出し可能だと考えられる。話し手は，その推論の過程を利用することにより，聞き手の受容に対して効果を及ぼしていると考えられる。周りとの認識が異なる場合の使用が「し」の持つ基本的機能だと考えられる。

また，「よ」は「聞き手への受容要求」を持つが，「説明する態度」や「聞き手と話す態度」を残している点で「し」との異なりがみられる。また，「から」は，話し手が，「これが確固たる理由・根拠」と考えるものを聞き手に強く主張することにより，話し手に何らかの行動要求を促す機能を持つと考えられる。

談話標識の研究では，これまで「副詞」「接続詞」などの研究はみられたが，自立的要素ではない助詞などについての研究はまだ少ないと考える。「し」及び「から」「よ」以外の助詞類が談話の中でどのような機能を持って使用されているのかを今後も検討する。

（おおやま　たかこ・言語文学専攻）

参考文献

加藤重広（2001）「文末助詞「ね」「よ」の談話構成機能」，『富山大学人文学部紀要』 35 巻
加藤重広（2001）「談話標識の機能について」『東京大学言語学論集』20　東京大学
加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』町田健（編） 研究社.
加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社
国立国語研究所（1951）（1984）『現代語の助詞・助動詞』国立国語研究所報告 3　秀英出版
白川博之（1993）「「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」」『広島大学日本語日本語教育学科紀要』3
白川博之編（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
鈴木和彦・林　巨樹（1973）『助詞』品詞別日本語講座 9　明治書院
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
宮崎和人，安達太郎，野田春美，高梨信乃（2002）『モダリティ』新日本語文法選書 4　くろしお出版

用例出典

フジテレビ放送　2014，2015 年　『紙兎ロペ』